

御誓文五箇條ノ和解

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

此の御誓文ハ

皇太后御事成御下ノ一人の私事ありぬよ
皇太后人とおほやけし評議し事のものし
を承りちがぬよに定め決す應し

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ

此の御誓文ハ

上たる人々下のため下する者ハ上れたためとす

親しみ遠く心を一つにし経綸を以てはるの
たてしものあつく筋道の正しくまた誠ある
よかりあることを取り終ふまでし

一官武一途庶民ニ至ルマデ各其志ヲ遂ゲ人心ヲ
シテ倦マザラシメンコトヲ要ス

あの御報意ハ

な家と武家とをだるす一とをぢはしてする
者ハもやより農民も士族も人おの下の下
至るまでよく其志すはとげ人々の心を

しそ近きあふよくまゐるを要と

一舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

あの御報意ハ

それよりいへし親愛いとすちきれまぬ
かゝるものある勲業をやめて土地の依怙恩恵あはれ
ある道々素き果樹の事をとりあつふべし

一智識ヲ世界ニ求メ大ニ

皇基ヲ振起スベシ

あの御報意ハ

身がう家うに拍うに智恵ん識りて衆人
すぐれたる人成を果の中より召ね出
皇國の基業を振ひおさるゝ衆ふゝ威名をか
うそよさすべ

御高札御定書三箇條ノ和解

定

一人あるものみ偏のき成ふゝゝも過ぎます

その清極意ハ

も過ぎる人々けきたる者々貴族も残きも偏の

道として地内軍け始ゝよりその本筋たり
とそふよりてあり是をよく守るを正すといふ
即ちたの条々あり
親子の中より天然に備りたる者ゝみ何
そのゆゑいのあたゝゝ兵を失ふやうなり
親と孝行成るゝ親は子をいつゝも愛せあり
主人と家来との間ハ自然と移るゝ義理筋合の
何るものなりその筋合を取り違つば家来主人へ
おれをさるゝ主人ハ家来（なすけ）をかけ無理

三
非是のあきうなりいたずきなり

○夫婦の中は志たふみわくぐ中をもあつとむる
のある處き事なりいかにいふ夫婦となむ
情欲はあはれ親見ずりも志たふくなり
親り事いともぬるをもあはれすくむる
志たふみすだて違ふ一處に内をむきておさめぬ
ふとなるそれあり是を能く心掛てはかちを失えぬ
いふす

○先くせきたるを長といひ後くせきたるを短と

いふ長短跡先の法いでを失はずして見ゆをす
取どしゆはよくはしと見えは互に仲よくす
○なたちのつき合ひは廣きものなりといひかたを
約束なり教ふる事なりは教へては人々
あるまらしと失ふとせいつのりのかれふ
す

一 鰥寡孤獨癯疾のその孤惘むき事

その孤惘むき事
老後して其の憂き事を鰥といひ年老て其の憂き

を寡といひ幼くして父の寡に者を孤せしむ
年よりて子れなきを獨と云ふ又病氣に罹りて
後と云ふにたりたるもの足るはあはれ或は
めづかたきもの難を履てかゝだの不和合ある者状
瘵疾といふ此のふつ乃者天下に困窮者多し又母
妻子難と云ふ病を親と云ふにほもなき殊にむづき
そのなきに一一ほ深く不便なる者をかけそ
物を阿へ一縁急凍へぬふふす難きなり
一人を殺し家財焼き財を盗む等の悪業ある

あゝく事

己の汚穢を

人をむさ殺したり人の家より火を附り

まゝ人の家の火を附りて金銀財宝などを盗取

振あるあゝき業はいふまでもなくそれく

せんお業は励めて善事を修めし

右先年被 仰出候

御誓文ト御定書ハ更始御政體之大基本ニ候處

未々ニ至リ文字疏キ者御趣肯ヲ汲違ヒ候テハ動モス

六罪ナキ罪ヲ負モノモ有ンガ為ニ更ニ和解シテ之ヲ
布達ス日々夜々ニ拜讀シテ心得違ナキ様可致事

壬申
三月

石川縣廳

